TOP（トップ）インタビュー

PrintNext2018実行委員長　山本素之（㈱美生社）

継続の本質知り「強い企業になるために」

２月10日㈯、大阪市北区中之島の市中央公会堂で、印刷関連団体の青年印刷人らによる合同事業「PrintNext2018」が執り行われる。開幕を目前に控え、運営統括は何を思いどんな期待を込めるのか。７つの質問を通じて、山本素之実行委員長（㈱美生社社長）の本音に迫った。（上田）

①自身のPrintNext歴は

初参加は名古屋で開催された「PrintNext2014」で、当時の運営委員の赤いネクタイが眩しかったのを覚えています。続く「同2016」では、近畿ブロックの分科会のメンバーとして参画。仕事の魅力を伝える『私たちはなぜ印刷業を営んでいるのか？』をテーマに自分たちで汗をかき、考え、実行し、答えを導き出すプロセスを経験しました。これを通じて得た仲間意識、やり遂げた充実感は今でも鮮明に覚えています。

②テーマ設定の経緯や狙いについて

今回の開催テーマは『強い会社になる為に、そして企業を永く継続する為に。』。決定までにいろんな方々のさまざまな意見に耳を傾けてきました。

そして自分なりの答えが「継続」でした。

そもそも諸先輩方はなぜPrintNextを開催しようと思ったのか・なぜ今日まで続いてきたのか。続いてきたという現実と、続けていくという覚悟。その解の根底にある本質は、自身の会社に置き換えても同じことが言えるのではないか。

継続するためには会社が強くならないといけない。同時に、継続という本当の意味を忘れてはいけない。新入社員から経営者まで、共通認識にしたい命題として、テーマと定めました。

③プログラムに関して

今回、超実践型特別企画として『プリネクカップ大阪の陣』を開催します。テーマで謳う「〝強い会社〟とは何か」と考えた末、強い会社→選ばれ続けられる会社→自分たちで仕事を造る会社、と定義しました。

全国８ブロックに「自分たちで仕事を造るコンテンツを考えてほしい。なんでもいい。PrintNextだからこそできる、思い切った企画を」とお願いした結果、個性あふれるテーマが出そろいました。プログラムの詳細は当日の発表となりますが、今後の皆さんの新たなチカラとしてお役立ていただければ幸いです。

また「親子で語ろう未来の印刷」は子供と自分の仕事の話をし、そこで生まれた〝未来の印刷〟を作品にする企画。80点を超える作品はどれもほっこりするものばかりで、審査に苦労しました。ご応募いただいた皆さまに感謝いたします。

④前回と「ここが違う」「ここがチャレンジング」

まず「大きなイベントにしなくてもいいのでは」、ということ。これからどんな地域でも開催できるように集客目標、予算、協賛企業など〝スモールプリネク〟を目指しました。

また前回、同時刻に複数同時開催してきたブロック会（分科会）の発表を、今回はすべて見られるように構成を改善。ほかにも基調講演をしないなど、思い切った判断を下しました。

当日、皆さんからどんな感想が聞けるか楽しみです。

⑤参加側から運営側となり、何を得て何を学んだか

14は一般参加、16は近畿ブロックのいちメンバー、18は実行委員長と、あまりにもジャンプアップし過ぎたことは自身にとってマイナスのイメージしかありませんでした。しかし、実行委員長としての苦しみ・また喜びや楽しさを経験できたことは、これからの自分にとって大きな財産となったと実感します。

実行委員は貴重な時間とお金を使って参加しています。そんなメンバーにも何かかんでもらいたい。彼らには、絶対に下を向かずに楽しんでほしいとお願いしました。運営側が楽しまないと、全国からの来場者各位もきっと楽しめません。本番当日、主催者が楽しんで運営している姿をご覧いただけるでしょう。

⑥来場者には何を感じてもらい、それをどうつなげてもらいたいと願うか

印刷産業の次代を担う青年会が、組合の垣根を越えて主体的に協働し、印刷の未来を共創する。それがPrintNext本来の姿です。

自社を強くしたいと願う気持ちは皆同じ。プリネクカップを通じて、いろんな考えのある人たちが、一つのゴールに向かって行動した８つの「軌跡」を感じてもらいたいと思います。

大成功を収めたかもしれませんし、失敗したかもしれません。いずれにせよ、チャレンジした仲間の姿を見届けてほしい。そこから「自分たちもできる」ことを感じてもらえればと願っています。何もないところから誰もやってないことを企画し、地域でメンバーを募い活動した一連の経験を糧に、必ずや強い会社・永く継続する企業を作っていくと確信しています。

２年後のことは分かりません。今回ご参加いただいた方の中から手が挙がるに越したことはありません。ただ、無理矢理行う事業でもないと思います。私は「継続」だと思ったからこそ、開催することができました。今回のPrintNextを通じて、何かしら感じるところはあるでしょう。次世代の方が何かを感じたのなら、自ずと「PrintNext2020」はどこかで開催され継続していくことでしょう。

⑦最後に総括を

PrintNext2018の開催にあたり、近畿のメンバーを中心に集まり運営に携わりました。自分一人では何もできないことをあらためて再認識しました。

でも一人じゃない、仲間がいる。それぞれの実行委員メンバーがいて、強みと弱みをオープンにしそれぞれ助け合う。実行委員会の回数を重ねるたびに、実行委員が増えていきました。実行委員長としてこれほど心強かったことはありません。本当に感謝しています。

青年部のイベントだから思い切ってやればよい、とよく耳にします。その意味が、無事幕を閉じたときに少し分かるような気がしています。携わった者しか分からない経験と、そして全国の皆さんと出会える機会を与えてくれるPrintNextに感謝したいと思います。